

Possibilities for Vocabulary Expansion in Korean Language Education: An Analysis of Vocabulary in University Textbooks and an Attempt at Vocabulary Supplementation

INAGE Megumi

Abstract

This study examines the current state and challenges of Korean vocabulary education in Japanese universities by comparing the vocabulary presented in widely used textbooks with the vocabulary required for Korean language proficiency tests. The analysis revealed that even textbook series designed for four years of study provide learners only several thousand words, whereas the Test of Proficiency in Korean and Hangul Proficiency Test require a much larger vocabulary at the intermediate and advanced levels.

Since Korean language classes at Japanese universities must cover pronunciation, grammar, reading, conversation, and writing simultaneously, there are practical limitations to expanding vocabulary sufficiently through classroom instruction alone. Therefore, this study focuses on two-character Sino-Korean verbs, which are relatively accessible to Japanese native speakers, and presents 600 Sino-Korean verbs as supplementary material for the intermediate-level textbook *Kankokugo Jūyō Bunkei Renshū 240* [*Intermediate 20*] (*Korean Key Sentence Pattern Practice 240* [*Intermediate 20*])).

This study discusses the necessity of a gradual and systematic approach to vocabulary learning that integrates in-class and out-of-class learning and explores the potential for vocabulary expansion by utilizing the shared characteristics of Sino-Korean vocabulary between Japanese and Korean. Future research should examine the effectiveness of this approach through actual classroom practice.

キーワード：韓国語教育、目標語数、語彙拡張、漢語動詞、語彙拡充、段階的・体系的学習

韓国語教育における語彙拡張の可能性 ——大学教材語彙の実態分析および語彙拡充の試み——

稲 毛 恵

1. はじめに

外国語教育において、語彙教育は文法教育と並んで重要な要素の一つである。発音をはじめ、文法、会話、読解などの外国語運用能力を高めるためには一定規模の語彙力が必要なのである。日本の大学における韓国語教育では、初級段階において500～1,000語程度の語彙が導入されることが多い。一方、中級以上の段階では、発音指導、新たな文法項目の提示、作文指導など多様な学習内容を扱う必要があるため、語彙指導に充てられる時間は相対的に減少する。そのため、新規語彙の導入数は初級段階と比べて大きく減少する傾向がみられ、授業内の指導のみで十分な語彙拡張を図ることには限界がある。

近年、日本ではK-POPやドラマ、映画、美容、ファッションに加え、韓国文学への関心も高まるなど、韓国文化の受容が多様な分野へと拡大している。こうした社会的背景を受け、韓国語学習への需要も継続的に増加している。それに伴い韓国語学習者も増加し、単なる趣味の域を超えて、将来を見据えて学習に取り組むケースも見られるようになった。神奈川大学においても現在60クラス程度の韓国語科目が開講されているが、毎年定員を超える履修希望者が出ている。授業内では「好きなアーティストの

話を理解したい」「ドラマや映画を字幕なしで観たい」「韓国の友達と韓国語で話したい」という趣味領域から「将来の進路や職業に韓国語を活用したい」といった動機を持つ学生も増えている。多様化する学習動機を充足するためには、実際のコミュニケーションや将来的な専門領域で活用できるほどの言語能力を育成する必要があるが、その基盤として最も重要となるのが語彙力である。

尹亨仁（2022）は、日本の大学における韓国語語彙教育では、最も大きな割合を占める漢語、特に2字漢語動詞を段階的・体系的に提示する必要性を指摘している。野間秀樹（1996）も、漢字文化圏の学習者に対しては、漢字音や漢字語に関する対照言語学的知識を体系的に提示する必要性を述べた。また、語数についても、初級段階では少なくとも850語から1,000語程度の語彙を学習する必要があるとしている。

こうした語彙教育の重要性は、韓国語能力試験（以下、TOPIK）やハングル能力検定試験（以下、ハン検）にも反映されている。TOPIKやハン検では、中上級段階において、社会、文化、環境、経済などをテーマとした説明文や評論文が多く出題されるため、豊富な語彙の知識や理解が必要となる。ハン検の公式ガイド『合格トウミ』には、5級から1級までの語数が約11,200語に及んでいるが、1級ではリスト外の語彙も出題されるため、実際に求められる語数はそれ以上である。

しかし、日本の大学で使用されている韓国語教材を見てみると、大学4年間を想定した教材であっても、提示される語数は数千語規模にとどまっている場合が多い。本稿で分析対象とした『総合韓国語』1巻から4巻では延べ語数が4,783語、『パランセ韓国語』初級・中級・上級では延べ語数が2,603語であった。これらの教材で習得した語彙のみで外部試験に対応することは容易ではない。実際、筆者も特に中級教材の作成に携わる中で、発音指導を含め、読解、文法説明などのバランスを考慮すると、教材

の中に導入できる新規語彙の量には限界があることを実感している。

このような制約のもとでは、教材だけでは不足しがちな語彙を補い、授業内外を連続させて継続的に語彙学習を促すための補助教材の存在が不可欠であると判断し、中級学習者を対象として二字漢語動詞 600 語を整理した付録資料を作成した。

本稿では、日本の大学で使用されている韓国語教材の語数および語彙構成を分析するとともに、TOPIK およびハン検との比較を通して、大学韓国語教育における語彙教育の課題や問題について検討する。その上で、補助教材として作成した付録資料、二字漢語動詞 600 語を通して、授業内外を連続させた段階的・体系的な語彙拡張の可能性について考察する。

2. 先行研究

これまで、日本の大学における韓国語教育については多くの研究が行われてきた。しかし、その多くは教材構成や教授法を対象にしたものであり、語彙教育、とりわけ日本語母語話者にとって重要性の高い漢語語彙の段階的・体系的な指導方法に焦点を当てた研究は限られている。

中島仁（2021）は、日本の大学における韓国語教育が 1980 年代以降に拡大し始め、1990 年代以降には急激に増加したことを指摘している。2002 年には大学入試センター試験の外国語科目として韓国語が正式に導入されたことは、日本社会における韓国語の位置づけを確立する大きな契機となったと述べた。この時期は韓国ドラマや K-POP を中心とした韓流ブームの拡大期とも重なっており、韓国語への関心も一気に高まった時期である。その後も韓国語への関心は一過性のものにとどまらず、現在も継続している。

文嬉眞・金美淑（2014）は、韓国語学習の到達目標と目的について調査

した結果として「韓国に興味があるから」「韓国旅行ができるまで」「簡単な本が読めるまで」「検定試験に合格するまで」といった回答が多く見られたことを報告している。これらの結果から韓国語学習者の目的が趣味的関心にとどまらず、実際の言語運用能力の向上や資格取得を視野に入れたものへと広がっていることが読み取れる。

朴珍希（2017）は、授業内外における学習意欲を増進させるためには、学習者が自律的に学習できる環境を整え、学習動機や目標を詳しく把握した上で、それに応じた柔軟かつ明確なカリキュラムを設定しなければならないと述べている。

筆者も、尹・稲毛（2023）で提案した「参加誘導型学習」の考え方に基づき、学習者の「気づき」や「自発的参加」を促しながら、授業内外を連続させた語彙学習のあり方を検討している。

尹（2022）は、日本で使用されている韓国語教材について、語彙調査やそれに基づいた語彙選定が十分に行われていないと指摘している。また、教材作成においては、初級レベルまたは中級レベルで求められる文法項目に合わせて、チャプターの構成をし、文法と語彙を組み合わせる形で会話文や用例が作られるため、教材に用いられる語彙数は制限されたり文がやや不自然になったりすると述べている。さらに、日韓両言語において「漢語動詞は最も共通性の高い語彙群」であり、「漢語は両言語の学習者がすでに持っている『言語資産』とも言える」としている。そのため、漢語動詞は「活用次第、語彙力を飛躍的にとまでは言えないにしてもかなり上げられる要素」とであると論じている。

また、尹（2023）は、日本語と韓国語に共通する二字漢語動詞 1,290 語を分析し、その 80% 以上が正の転移を示すことを明らかにした。また、大学における韓国語教育に活用できる「基本漢語動詞」の選定を試み、レベルに応じた体系的な語彙提示の必要性を提案している。

これらの研究成果は、日本語母語話者を対象とした韓国語語彙教育において、日韓両言語に共通する漢字語の特徴を活用した語彙指導を検討する上で重要な示唆を与えるものと考えられる。

原瑞穂（2009）は、日本語の漢字能力は韓国語学習において有効に活用できるにもかかわらず、大学の韓国語教育では漢字語の知識や特徴を体系的に学ぶ機会が乏しいことを指摘している。また、その結果として、日本人韓国語学習者の語彙習得において、日本語の漢字知識が十分に活用されていない可能性があるとして述べている。このような日本語と韓国語における漢字語の共通性は日本語母語話者の語彙拡張を考える上でも重要な観点になる。

野間（1996）も漢字文化圏の学習者に対して漢字音や漢字語に関する対照言語学的知識を比較的早い段階から体系的に提示する必要性を述べている。韓国語語彙教育研究においても語彙教育の体系化について、Moon Geum-hyun（2010）は韓国語語彙教育において基礎資料や語彙リストなどの構築が重要であり、それを基にした体系的な語彙教育や教授法の整理が必要であると論じている。

以上の先行研究から、日本の大学における韓国語教育では、学習者ニーズの高度化に対して語彙教育、とりわけ漢語動詞を中心とした体系的な語彙拡張の仕組みが十分に整備されていないことが分かる。

そこで本稿では、日本の大学で使用されている韓国語教材の語数および語彙構成を分析するとともに、中級段階における漢語動詞約 600 語の付録資料を通して大学韓国語教育における語彙拡張の可能性について検討する。

3. 日本の大学教材における語彙提示の実態

3-1 分析対象教材および分析方法

日本の大学における韓国語教育では、学習者が授業を通してどの程度の語彙を習得できるかは使用教材や授業運営方法によって大きく左右される。そのため、大学韓国語教育における語彙教育の実態を把握するためには実際に使用されている教材に含まれる語数や語彙構成を具体的に分析する必要がある。

本稿では、日本の大学において比較的広く使用されている韓国語教材として『総合韓国語』1巻から4巻および『バランセ韓国語』初級・中級・上級を分析対象とした。これらの教材は、いずれも大学4年間の学習過程を想定して作成されている点で共通している。また、神奈川大学で実際に使用されている教材『教養韓国語初級』と、その続編として作成された『教養韓国語中級』および、尹と筆者が共同で作成した中級教材『韓国語重要文型練習 240【中級編 20】』についても分析対象に含めた。

分析にあたっては、本文、例文、練習問題などで実際に学習できる語彙を対象として延べ語数を集計した。これは、学習者が授業や教材を通して実際に接する語彙量を把握するためである。

一方、TOPIK やハン検については、公開されている語彙リストや参考書掲載語彙を基にした異なり語数を参考としている。そのため、本稿における教材語数と TOPIK やハン検の語数は、完全に同一基準による比較ではないことを断っておく。

日本の大学教材において学習者が実際に学習する語数と、TOPIK やハン検などで求められる語数との間には大きな差がみられる。本稿では、その実態を明らかにすることを目的として分析を行う。

また、本稿では中級教材『韓国語重要文型練習 240【中級編 20】』の付録語彙資料として、中級以降の学習を想定し、言語景観および『朝日新聞』の「社説」に見られる漢語動詞 600 語を語彙補充用付録として整備した。この付録資料として作成した漢語動詞 600 語を通して、日本の大学の韓国語教育における語彙拡張の可能性について検討する。

3-2 韓国語教材における語彙提示の実態

日本の大学において 4 年間の学習を想定して作成された『総合韓国語』1 巻から 4 巻について分析を行った。『総合韓国語』は、初級、初・中級、中級、中・上級の段階に分かれている。

『総合韓国語』における延べ語数は合計 4,783 語であった。巻別に見ると、第 1 巻が 1,062 語、第 2 巻が 1,659 語、第 3 巻が 899 語、第 4 巻が 1,163 語となっている。第 1 巻では初級段階に必要な基礎語彙が比較的集中的に提示されている一方、第 2 巻以降では既習語彙の再使用と新規語彙の追加が並行して提示されていた。中級以降においても語彙は継続的に追加されているものの、提示語彙量が大幅には増加する傾向は見られなかった。

『総合韓国語』1～4 の延べ語数

	延べ語数		延べ語数
総合韓国語 1 (初級)	1,062 語	総合韓国語 3 (中級)	899 語
総合韓国語 2 (初・中級)	1,659 語	総合韓国語 4 (中・上級)	1,163 語

次に、『パランセ韓国語』初級・中級・上級について分析を行った。延べ語数は、初級 530 語、中級 720 語、上級 1,353 語であり、合計 2,603 語であった。

『バランセ韓国語』の延べ語数

	延べ語数		延べ語数
バランセ韓国語 初級	530 語	バランセ韓国語 上級	1,353 語
バランセ韓国語 中級	720 語		

『バランセ韓国語』では、初級から上級へ進むにつれて語彙数が増加する傾向は見られているものの、全体語数は比較的少なく『総合韓国語』と同様に大学教材における提示語彙量には限界が見られた。

教材全体の語彙構成を見ると、初級段階では日常会話を中心とした語彙が多く、中級以降になると社会・生活・文化・経済などに関連する語彙が増加する傾向が確認された。それに伴い漢字語や漢語動詞の出現頻度も高くなることが明らかになった。このような傾向について、Ha Chae-hyun (2016) は、中級学習者には職場、教育、環境など社会的な内容を扱う語彙や漢字語、慣用表現などが求められると指摘している。

実際、TOPIK やハン検などの外部試験では、社会問題や時事的変化などを扱う説明的内容が多く出題されるため、漢語動詞を中心としたより幅広い語彙理解が求められる。大学教材においても一定量の漢語動詞は提示されているものの、外部試験や実際の言語運用に対応できる語彙力を身につけるためには、中級以上で必要となる語彙を継続的かつ体系的に学習することが求められる。そのため、補助的な語彙資料を活用した語彙拡充が必要であると考えられる。

3-3 大学教材における語彙教育の課題と補助教材活用の試み

神奈川大学の初級授業で実際に使用している『教養韓国語初級』と、尹と筆者が共同で作成した中級教材『韓国語重要文型練習 240 【中級編 20】』についても分析を行った。市販教材だけでは把握しにくい実際の授業運営

上の制約や大学教育現場における語彙教育の実態と課題を検討するためである。

『教養韓国語初級』の延べ語数は1,007語であった。中級クラスで採用はしていないが、『教養韓国語初級』の続きとして作成された『教養韓国語中級』の延べ語数は457語であった。

これらの教材の語彙構成を見ると、いずれにおいても固有語が高い割合を占めていたが、中級教材では初級教材と比較して、漢字名詞や漢語動詞の割合がやや増加していることが確認できた。特に、「반납하다 (返却する)」「합의하다 (合意する)」「결정하다 (決定する)」「개발하다 (開発する)」のように、手続きや判断、調整、計画など、事柄の進行や処理に関わる語彙が多く見られた。こうした語彙は、中級レベル以上で求められる言語運用能力や、TOPIK・ハン検で扱われる内容とも関連していると考えられる。

しかし、大学の韓国語教育では、語彙指導だけでなく、発音、文法、読解、会話、作文などを並行して扱う必要があるため、限られた授業時間の中で中級としての十分な語彙を安定的に導入し、学生たちに定着させることは容易ではない。

しかも、学習者間では学習内容の定着度に差が見られるため、中級レベルであっても初級で学習した語彙や文法内容を継続的に復習しながら確認する必要がある。新規語彙を大量に追加し提示すると学習者への負担が大きくなり、学習意欲の低下にまでつながる可能性もあるため注意が必要である。実際、語彙量を多少無理に増加させた場合、学習者にとって内容理解の負担が大きくなり、学習全体が不安定になり、授業内容をより難しく感じてしまう学生の傾向も見られた。

このような課題を踏まえ、尹と筆者は中級教材『韓国語重要文型練習 240【中級編 20】』の付録資料として漢語動詞約600語を整理した。学習

者には書き取りや小テストを通して継続的な学習を促しており、授業内で十分に扱うことが難しい語彙の定着をサポートするとともに、授業外学習との連携を図ることを目的としている。

また、実際の言語景観や新聞社説などで頻繁に使用される漢語動詞を提示することで、学習者が教室外で接する韓国語表現の中からも継続的に語彙を学習・習得できる環境の構築を目指した。

このような試みは、尹・稲毛（2023）の提唱する「参加誘導型学習」の考え方とも関係している。単なる語彙の暗記にとどまらず、実際の韓国語使用場面の中で既習語彙に繰り返し触れることにより、語彙の定着や運用能力の向上につながる可能性があると考えられる。

4. 韓国語能力関連試験に見る語彙規模と大学教育の課題

4-1 韓国語能力関連試験における語彙規模

外国語教育において、語彙は読解・聴解・作文・会話など、すべての言語活動を支える基盤的要素である。韓国語教育においても、学習段階に応じた語彙規模をどのように設定するかは重要な課題となる。

本稿では、日本国内で広く利用されている韓国語の能力を測定するための TOPIK およびハン検にも着目した。これらは学習者の韓国語の能力を測定する代表的な指標であり、大学教材における語彙提示量を検討する際の基準として有効であると考えられる。

表から分かるように、TOPIK とハン検では級が上がるにつれて必要とされる語数が増加することが確認できる。特に上級では日常的なコミュニケーション能力にとどまらず、新聞記事や専門的な内容を理解するための語彙だけでなく、業務遂行能力や研究活動などの場面でも円滑に運用できる言語能力が求められる。その根拠として、TOPIK 6 級やハン検

難易度	レベル		語数		到達レベル
	ハン検	TOPIK	ハン検	TOPIK	
初級	5 級	1 級	1,100	1,847	基礎語彙、基本文法、簡単な文章
	4 級	2 級			簡単な日常会話可能
中級	3 級	3 級	4,900	3,873	日常の韓国語を理解、表現可能
	準 2 級	4 級			幅広い場面での理解、表現可能
上級	2 級	5 級	5,200	公開無し	専門分野での表現を理解、駆使
	1 級	6 級			研究・業務能力可能、流暢に駆使

1 級の合格者には、全国通訳案内士試験の外国語筆記試験（韓国語）が免除されるという基準が設けられている。

前で確認したように、日本の大学教材における提示語数は、多くても数千語規模にとどまっていた。しかし、TOPIK やハン検では中級段階から数千語規模の語彙理解が求められ、特に、ハン検では上級段階までに 1 万語を超える語彙が『合格トウミ』提示されている。また、実際に韓国語を用いて業務や専門的な内容を扱う場合にも、教材で提示される語彙を超えた幅広い語彙力が必要となる。こうした点から、大学教材における提示語数と、外部試験や実際の言語運用場面で求められる語彙規模との間には大きな隔たりが存在することがうかがえる。

4-2 大学教材との比較から見える課題

今までは TOPIK およびハン検において中上級段階になるにつれて大規模な語彙力が求められることを確認した。そこで本節では、日本の大学で使用されている韓国語教材の語彙提示の特徴を踏まえながら、大学教育における語彙教育の課題について検討する。

本稿で扱った韓国語教材の『総合韓国語』1 巻から 4 巻における延べ語数は 4,783 語、『パランセ韓国語』初級・中級・上級では 2,603 語、『教養

韓国語』では初級・中級のみではあるが1,464語であった。

本稿では大学教材の語彙量は延べ語数を基準としており、TOPIK やハン検における語彙規模とは同一基準による比較ではない。そのため、厳密な統計比較ではなく日本の大学教材における語彙提示規模と、中上級段階で求められる語彙規模との差を概観的に検討することを目的としている。

本稿で分析した教材では、「문화 (文化)」「경제 (経済)」「사회 (社会)」のような漢字語名詞は確認されているが、「발생하다 (発生する)」「해결하다 (解決する)」「결정하다 (決定する)」「조사하다 (調査する)」「개발하다 (開発する)」など、社会的・説明的内容を理解する上で重要な漢語動詞については、各課のテーマや文法内容に応じて部分的に提示される場合が多く、体系的・継続的に学習することには限界が見られた。

大学の韓国語授業では、文字・発音指導、文法説明、会話、読解、作文などを並行して行う必要があるため、限られた授業時間の中で新規語彙を継続的かつ大量に導入することには現実的な制約が存在する。中級以上になると学習者間の習熟度差への対応も求められるため、既習語彙や既習文法の確認にも時間を割く必要がある。

韓国語の語彙学習では、意味の理解だけでなく発音変化や活用形の習得も求められるため、語彙提示に加えて音読練習や例文による定着活動も必要となり、授業内だけで十分な語彙拡張を図ることには限界がある。

表からも分かるように、日本の大学教材における語彙提示量と、

区分	初級	中級	上級	計
総合韓国語	1,062	1,659 + 899	1,163	4,783
バランス韓国語	530	720	1,353	2,603
教養韓国語	1,007	457		1,464
TOPIK	1,847	3,873	公開無し	5,720 (+ a)
ハン検	1,100	4,900	5,200	11,200

TOPIK やハン検などで求められる語彙規模との間にはかなりの差が見られる。したがって、既存の教材だけでなく、補助資料や授業外学習を活用しながら、段階的かつ継続的に語彙を拡充していく必要がある。稲毛(2025)も指摘しているように、日本の大学では授業時間に制約があるため、授業外でも継続的に語彙教育を行うことができるように環境を整え、学習者が長期的に語彙を蓄積できるよう、自主学習をサポートする仕組みを整備することも重要である。

4-3 語彙拡張における漢語動詞の重要性

日本語母語話者にとって、韓国語の漢字語は語彙拡張を支える有効な資源である。特に、中上級段階で必要となる漢語動詞を継続的に学習することは、読解力や表現力の向上にもつながると考えられる。

尹(2022)は、外国語教育においては段階的導入と体系的提示が重要であると述べ、日本の大学における韓国語教育では2字漢語動詞を段階的・体系的に提示する必要性について指摘した。また、ハン検問題で実際に使われた漢語動詞の分析を通して、レベルが上がるにつれて漢語動詞の使用が増加していることを明らかにしている。このような現実的需要に対応するためには、大学教育においても中級以降の漢語動詞教育を継続的に行う必要があると考えられる。

また、尹・車(2014)は、韓国語と日本語の2字漢語動詞について分析を行い、日韓両言語において2字漢語動詞の7割以上が対応関係を示していると述べている。さらに、4,000以上の2字漢語VNが対応関係を示していることを指摘しており、日本語母語話者にとって、漢字語の共通性が語彙理解や語彙拡張に活用可能であることがうかがえる。

実際、韓国語と日本語では、「유지하다(維持する)」「확대하다(拡大する)」「해결하다(解決する)」のように、漢字語を共有する語彙が多く存

在している。このような漢語動詞は、中級以降の学習内容、TOPIK、ハン検、新聞記事、説明文などで頻繁に使用されており、内容を説明したり、自分の考えを整理して述べたりする際にも重要な役割を果たしている。

一方、日韓両言語における漢語動詞には意味や用法が完全には一致しないものも存在する。尹・車(2014)は、「공부(工夫) 하다—勉強する」のように、漢字表記のみでは単純対応できない例についても指摘している。このような語彙は、日本語母語話者にとって負の転移を引き起こす可能性もあるため、単純に語数を増やすだけではなく、意味や使用場面も含めて体系的に提示する必要がある。

原(2009)も、日本語母語話者の韓国語学習では、日本語の漢字知識を活用することによって語彙学習を促進できる可能性があると言っている。

日本語母語話者の場合、韓国語の漢字語は意味を推測しやすいものも多く、語彙学習において利点が存在していると考えられるが、その一方で日本語と韓国語では、同じ漢字語であっても意味や使用場面が完全には一致しない場合も少なくない。そのため、実際の文章や会話の中でどのように使用されるかを確認しながら学習を進める必要がある。

中・上級レベルでは、社会・文化・経済などに関する内容を理解するための語彙力も必要となる。原因や変化、意見提示、問題解決などを表す漢語動詞が繰り返し使用されるため、これらの漢語動詞を理解していることは、説明的内容や論説的文章の理解を支える重要な基盤となる。

しかし、日本の大学教材では、中上級段階で必要となる語彙を継続的に学習させることが難しい場合もある。

筆者が担当する中級・上級授業においても、学習者が個々の語彙の意味は理解できていても、文章全体の内容や論理展開を十分に把握できない場面が見受けられる。特に、説明文や論説文では漢語動詞が頻繁に用いられるため、これらの語彙への理解は文章理解を支える重要な要素の一つであ

ると考えられる。

このような点を踏まえると、中上級段階における語彙拡張のためには、教材で扱われる語彙に加え、漢語動詞を中心とした補助的な語彙資料を継続的に提示しながら、段階的かつ体系的に語彙力を拡張していく必要がある。

5. 漢語動詞を活用した語彙拡充の試み

5-1 補助教材作成の背景

日本の大学における韓国語教育では、中上級段階になるにつれて社会・文化・経済などに関する内容を理解するための語彙力が求められる。しかし、教材や授業時間には一定の制約があり、中上級段階で必要となる語彙を体系的かつ継続的に提示することは容易ではない。

筆者は尹と共同で、中級段階用教材『韓国語重要文型練習 240【中級編 20】』で、読解を取り入れながら中級段階で必要となる文型や語彙を提示するとともに、初級段階で学習した文法や基礎語彙の復習も行えるよう構成した。しかし、実際の授業では学習者によって既習内容の定着度に差が見られ、中級段階においても既習語彙や既習文法を継続的に確認し、復習を行う必要があった。そのため、教材の中で新規語彙を十分に追加しながら指導することへの限界を実感した。

尹（2022）が日本の大学における韓国語教育では、最も多い語彙数を占める漢語、とりわけ2字漢語動詞を段階的・体系的に提示する必要性を指摘しているように、日本語母語話者の場合、日本語と韓国語における漢字語の共通性を利用しながら語彙学習を行うことが可能であると考える。

そこで、教材分析および授業実践を通して得られた課題を踏まえ、中級段階で継続的に学習可能な漢語動詞 600 語を付録資料として整理した。こ

れは教材による学習をサポートするとともに、授業外学習との連携を図りながら継続的な語彙学習を促すことを目的としている。

5-2 漢語動詞 600 語付録の構成

『韓国語重要文型練習 240 【中級編 20】』で付録資料として作成した漢語動詞は、日本語母語話者にとって比較的理解しやすい二字漢語動詞を中心として 600 語を整理したものである。

語彙の選定にあたっては、言語景観および『朝日新聞』の社説に見られる漢語動詞を参考とし、中上級段階の学習者が接する可能性の高い語彙を中心に収録した。また、社会・文化・経済などに関する説明的内容や論説的文章において使用頻度が高い語彙を優先的に取り上げている。

付録資料では、「愛用する (애용하다)」「暗記する (암기하다)」「案内する (안내하다)」「悪化する (악화하다)」のように日本語との対応関係が比較的明確な語彙に加え、「適用する (적용하다)」「維持する (유지하다)」「縮小する (축소하다)」「改善する (개선하다)」のように、説明文や論理的文章の中で頻繁に使用される漢語動詞も含めた。これらの語彙は、中級以降の教材、TOPIK、ハン検、新聞記事などにおいて繰り返し用いられるものであり、内容理解や表現活動を支える重要な語彙群であると考えられる。

また、学習者が授業外でも継続的に活用できるよう、日本語の五十音順に整理している。これは授業内で学習した語彙を確認するだけでなく、必要に応じて辞書的に参照しながら復習できるよう配慮したものである。

この付録資料は、教材で扱われる語彙の学習をサポートするとともに、授業外学習との連携を図りながら、中上級段階に必要な語彙を継続的に学習できるよう構成したものである。

5-3 漢語動詞を活用した語彙拡張の試み

『韓国語重要文型練習 240【中級編 20】』は、前期 100 分授業 14 回（うち 1 回は臨時試験およびまとめ）での使用を想定して作成された教材である。本教材の延べ語数は 455 語であり、中級段階で新たに導入される語彙だけでなく、初級段階で学習した既習語彙や既習文法とともに再提示される語彙も含まれている。そのため、実際の授業では、既習内容を確認しながら段階的に語彙指導を行う形となっている。

付録資料として整理した漢語動詞 600 語を、授業期間全体を通して継続的に学習することで、教材本文で扱う延べ 455 語に加え、学習対象として提示することが可能となる。この語彙量は、学習者が 1 日あたり約 10 語前後を継続的に学習することを想定したものである。

学習した語彙については、毎回授業内で小テストを実施して定着状況を確認するとともに、学習した漢語動詞を活用した作文課題を課し、語彙の提示・定着・運用を意識した指導を行っている。学生からは、「多くの語彙を習得できる」「漢語動詞の仕組みが分かることで、新しい語彙も推測しやすくなった」「五十音順に整理されているので覚えやすい」といった肯定的な反応も見られている。

本実践では、教材で扱う語彙と付録資料の漢語動詞を並行して学習することにより、授業内外を連続させた語彙学習を試みた。特に、言語景観や新聞社説などで頻繁に使用される漢語動詞を継続的に学習することは、中上級段階における語彙理解や読解力の向上にもつながると期待できる。

このことから、漢語動詞 600 語の付録資料は、尹・稲毛（2023）が提唱する「参加誘導型学習」の考え方にに基づき、授業内外を連続させながら中級以降に必要となる語彙を継続的に学習できる環境づくりの一つの方法として位置づけられる。

6. おわりに

本稿では、日本の大学における韓国語語彙教育の現状について、教材分析、TOPIK およびハン検との比較、実際の授業実践を通して検討を行った。分析対象とした『総合韓国語』1巻から4巻の延べ語数は4,783語、『パランセ韓国語』初級・中級・上級の延べ語数は2,603語であり、大学4年間を想定した教材であっても、学習者が教材を通して接する語数は数千語規模にとどまっていることが確認された。一方、TOPIK やハン検では、中上級段階になるにつれて大規模な語彙力が求められており、日本の大学教材における語彙提示量との間には、単純な比較はできないものの、語彙提示において一定の差があることが明らかになった。

また、大学における韓国語教育では、語彙指導だけでなく、発音、文法、読解、会話、作文などを並行して指導する必要があるため、限られた授業時間の中で中上級段階に必要な語彙を継続的に提示することには現実的な制約が存在する。

こうした課題を踏まえ、本稿では中級教材『韓国語重要文型練習 240【中級編 20】』の付録資料として整理した二字漢語動詞 600 語についても検討を行った。日本語母語話者の場合、日本語と韓国語における漢字語の共通性を活用できるという利点があり、漢語動詞を段階的かつ体系的に学習することは、中上級段階における語彙拡張の一つの方法になり得ると考えられる。また、授業内で扱う語彙と授業外で継続的に学習する語彙とを連動させることにより、授業内外を連続させた語彙学習の可能性が期待される。

今後は、本稿で提示した漢語動詞付録資料が実際の語彙定着や読解力向上にどのような影響を与えるのかについて、継続的な授業実践を通して検

証していく必要がある。教材語彙と外部試験で求められる語彙規模との比較についても、より統一した基準による分析を行うとともに、中級以降で必要となる漢語動詞を継続的かつ体系的に学習できる環境の構築についても、引き続き検討していきたい。

参考文献

日本語

- 尹亨仁 (2022) 「日本語母語話者に韓国語の二字漢語動詞を体系的に提示するための取組みについて」『神奈川大学人文研究所報』No. 67、pp. 103-119.
- 尹亨仁 (2023) 「日韓両言語における 2 字漢語動詞の対応—1290 語の分析と『基本漢語動詞』の策定—」『神奈川大学言語研究センター紀要』第 16 号、pp. 113-145.
- 尹亨仁・車香春 (2014) 「韓国語と日本語の 2 字漢語動詞に関する一考察—韓日辞典に見られる異同を手がかりに—」『神奈川大学言語研究』第 31 号、pp. 1-24.
- 尹亨仁・稲毛恵 (2023) 「日本における言語景観を活用した韓国語教育の試み」『神奈川大学言語研究』第 46 号、pp. 1-30.
- 原瑞穂 (2009) 「日本人韓国語学習者の語彙習得：漢字語に関する韓国語教科書と学習者の研究」『東京女子大学言語文化研究』第 18 号、pp. 20-38.
- 野間秀樹 (1996) 「바람직한 한국어 교재란?—일본어화자의 경우— (望ましき韓国語教材とは?—日本語母語話者の場合—)」『東京外国語大学語学研究所論集』第 1 号、pp. 51-79.
- 文嬉眞・金美淑 (2014) 「日本の大学機関における『韓国語学習』—愛知学院大学の『韓国語』選択必修科目に関するアンケート結果とその分析 (1)—」『愛知学院大学教養部紀要』第 61 巻第 4 号、pp. 69-84.
- 朴珍希 (2017) 「日本の大学における教養外国語科目としての韓国語教育—学習者への調査結果をもとに—」『岡山大学教師教育開発センター紀要』第 7 号、pp. 117-126.
- 中島仁 (2021) 「大学における韓国語教育の現況と問題点」『外国語教育研究ジャーナル』第 2 巻、pp. 230-235.
- 稲毛恵 (2025) 「日本の大学における韓国語語彙教育の現状と提言—1 万語提示を目指す体系的指導への試み—」『神奈川大学言語研究』第 48 号、pp. 89-102.

韓国語

- 문금현 [Moon Geum-hyun] (2010) 「한국어 어휘 교육의 현황과 과제 (韓国語語彙教育の現況と課題)」

『언어와 문화 (言語と文化)』第6巻第1号、pp. 109-135.

하채현 [Ha Chae-hyun] (2016) 「중급 한국어 어휘 교재 개발을 위한 기초연구 (中級韓國語語彙教材開發のための基礎研究)」『한국어문교육 (韓國語文教育)』20 한국어문교육연구회 (韓國語文教育研究会) pp. 199-229.

テキスト

油谷幸利・南相環 (2001) 『総合韓国語 1』白帝社

油谷幸利・南相環 (2002) 『総合韓国語 2』白帝社

油谷幸利・南相環 (2003) 『総合韓国語 3』白帝社

油谷幸利・南相環 (2004) 『総合韓国語 4』白帝社

金京子・喜多恵美子 (2009) 『バランス韓国語 初級』朝日出版社

金京子 (2010) 『バランス韓国語 中級』朝日出版社

金京子 (2022) 『バランス韓国語 上級』朝日出版社

金智賢 (2015) 『教養韓国語 初級』朝日出版社

金智賢・関由真 (2016) 『教養韓国語 中級』朝日出版社

尹亭仁・稲毛恵 (2026) 『韓国語重要文型練習 240 【中級編 20】』

ハングル能力検定協会 (2026) 『ハン検公式ガイドブック合格トウミ 初級編 5・4 級 改訂 2 版』

ハングル能力検定協会 (2026) 『ハン検公式ガイドブック合格トウミ 中級編 3・準 2 級 改訂 2 版』

ハングル能力検定協会 (2026) 『ハン検公式ガイドブック合格トウミ 上級編 2・1 級 改訂 2 版』

TOPIK 韓国語能力試験公式ホームページ <https://topik.go.kr> (2015. 03. 26) TOPIK 語彙目録資料 (2026. 05. 01 閲覧)